

農学ユニーク紳士録

「忠犬八子公」のご主人は農学部教授 上野英三郎博士

渋谷駅での待ち合わせといえば、ハチ公前が相変わらずの人気。さて、そのご主人様は、東大教授・上野英三郎博士ということは、あまり知られていない。

五月祭のイベントで学生たちが、農学部7号館にある博士の胸像を渋谷駅まで担いで、忠犬ハチ公と対面させたこともあった。

上野博士は、農学部の農業工学科につながる農業土木の専修コースを東京帝国大学に創設した人物で、農学部の大先輩にあたる。

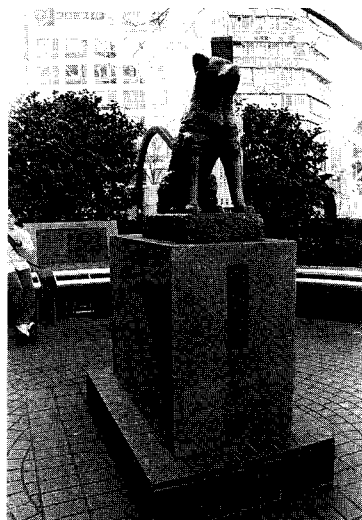
上野博士は1871年（明治4年）三重県一志郡久居市に生まれ、明治28年に東京帝国大学農科大学農学科を卒業し、大学院を経て母校に勤めながら農商務省の技師として河川改修や治水事業などに携わった。

やがて明治期に入ると、時の政府が全国の土地、農地、区画を整理する必要性が生じ、明治政府の支援を受けて耕地整理事業が展開した。その際、上野博士は「耕地整理法」を実施し、東大の農業土木の専修コース開設と相まって、ここから近代農業土木が進展していったのである。

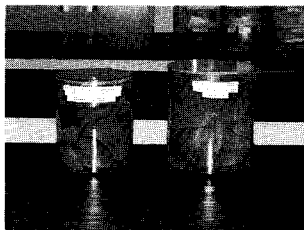
近代的な農業土木を拓いた上野博士は、1925年（大正4年）5月21日、駒場の教室で急死された。ハチ公（純粋の秋田犬）が飼われて1年半後の別



ハチ公の飼い主、上野英三郎博士。農業土木では草分け的な存在だ。



渋谷駅の銅像ハチ公。待ち合わせ場所として今も現役。



農学部に残されているハチ公の肝臓と心臓。病変がわかる。

離だった。以来ハチ公は、雨の日も風の日も死ぬまで渋谷駅に博士を迎えにいったとされているが、事情はやや異なる。

博士の死後、飼い主が何回か替わり、最終的に上野家に入出入りしていた庭職人の小林菊五郎さんの家に落ち着いた。その後、ハチ公の渋谷駅通いが再開したようだ。また、ハチ公の焼き鳥の屋台なじみ説もある。溝口勝助教授や獣医病理学の山本脩太郎名誉教授の話によれば、当時、渋谷駅周辺には焼き鳥の屋台が多くあり、上野博士はその常連客だったらしい。当然、ハチ公も屋台の親父さんと顔なじみになったはずだ。

そして、博士没後でも渋谷駅に通う姿を見て、親父さんらはおそらく同情してハチ公に焼き鳥を与えた。その証拠に東大農学部での剖検の報告書には、こんな解剖結果が記されている。「胃ニハ内容白色ノ糊様物ト 5cm位ノ長サ太サ5mmナル竹串先鋭ナルモノ3本 鈍端ナルモノ1本存在ス」。

国民的英雄となったハチ公は上野の科学博物館に剝製として保存され、臓器は東大農学部に標本として保管された。その分骨は上野博士の門下生の尽力で博士の眠る青山墓地に埋葬された。今でも博士の命日には、農業土木学会の有志が墓参会を行っているという。

切手になった鈴木梅太郎博士 世界で初めてビタミンを発見

鈴木博士は留学中に、欧米人よりも体格が劣る日本人の栄養改善を目標とし、主食の米を研究対象に定めたといわれる。事実、盛岡高農着任後、ただちに鶏を使って当時の風土病である白米病(脚気)の追試実験を行った。白米だけを食べさせた鶏は脚気のように脚がきかなくなるが、その病気にかかった鶏に糠を与えるとみるみる元気になる。

つまり、米糠中に脚気を治す成分が含まれていることが実験的に確認されたわけで、駒場に戻ってからは有効成分の抽出に取り組んだ。

その結果、1910年(明治43年)、米糠から抗脚気有効成分を分離精製し、同年12月の東京化学会の集会で実物を手にして発表、その物質をアベリ酸と命名した。発表の抄録は同年8月に、ドイツの学会誌に公表された。

その後、アベリ酸を「オリザニン」(イネの学名 *Oryza sativa* に由来。現在のビタミンB₁)と改名している。



切手にもなった鈴木梅太郎博士。持病を抱えながらもお酒は好物だった。



脚気を治療し、また、それを予防するばかりではなく、「動物の生存に必須の物質である」と説き、オリザニンは四大栄養素以外の“新栄養素”と主張し、脚気はこの栄養素(ビタミンB₁)の欠乏による栄養障害と正しく認識したのである。

博士は腸捻転症という持病を抱えていたため固定食を避け、宴会でもご馳走は眺めているだけで、もっぱら大好きな酒をちびりちびりと飲んでいったという。博士の持論は「酒は老人の牛乳」だった。自分が喜寿を迎えれば、酒の効用を実証したことになると話していたそうだが、文化勲章受章5ヵ月後の1943年(昭和18年)に69歳で他界された。

どろ亀さんの森は世界一元気がいい!

農学部附属施設のひとつ、北海道演習林は富良野市山部に位置し、1899年(明治32年)に設置され、1999年に創立100周年を迎えた。

どろ亀さんこと高橋延清先生(1912年生まれ)が東大農学部林学科卒業後、農学部助手としてこの演習林に赴任したのは1938年。36年後に退官されたが、現在も演習林とかかわり続け、樹海とともにじつに61年以上を過ごされている。

教授となっても、どろ亀さんは本郷の教壇に一度も立ったことがない。むろん学生たちには実習を行ったが、どろ亀さんにとって森の中こそ教室であり、真の教師は森自身だと考えていた。

先生が赴任した当時の森林は活力がなく、そこを何十年もはずり回り(酒好き[亀]の先生が泥まみれになって“どろ亀さん”のニックネームが誕生)、富良野の大樹海を理想の森に育て上げた。

北海道演習林の森林は原生林と見紛うが、それは総面積の0.2%を占めるにすぎず、残りはすべて択伐方式(ぬき伐り)による伐採の賜物だ。

先生は林分施業法を確立した。この方法の大原則は、「天然林は各林分が盛りの直前に早く達するよう誘導し」「途中相の森林は、このステージに向かって“施業”(林学の言葉で、作業を指す)する」というものだ。先生の理論によれば、森が最後に行きつく姿が極盛相(クライマックス)で、針葉樹と広葉樹が入り交じって針広混交の多相になる。極盛相は森が最も安定している姿だが、毎年の木材生産能力や環境保全に関しては、極盛相の一手前(プレ・クライマックス)のほうが能力が高い。

そこで、人間が手助けをして、林分をよく見きわめて極盛相の直前にある最高の機能をもつ針広混交の多層林に誘導すると、森はどんどん育つ。実際、東大演習林の単位面積あたりの木の収穫量は北海道で最大だ。そればかりでなく、活力にあふれ、微生物から昆虫、野鳥、動物まで生き物たちは多様に富んでいるのだ。



どろ亀さんを抜きに日本の森林は語れない。